今日における大豆流通と問屋の機能変化に関する研究
～国産需要増加期における道内産地問屋を対象として～

共生農業資源経済学講座　食料農業市場学分野
古賀　悦朗

（背景と目的）

大豆は、我々の食生活に非常に馴染み深いが、輸入拡大・自由化の波にいち早く揺さぶられ、加工メーカーはこれまで安さ頼みの輸入一辺倒体質を続けてきた。ところで昨今においては、食の安全・安心志向の高揚、原料原産国表示の進展などにより、内外価格差を乗り越えて、国産へシフトするといった新たな展開も一部見られるものの、本格的な利用拡大にまでは至っていない。それには、高価格、不均質、量的不足、激しい価格変動などといった問題が深く関わっているのもさることながら、流通構造そのものが非常に複雑であることも大きく関係していると思われる。そして、その複雑な流通構造のなかで、最も重要な役割を担っているのが、産地と加工メーカーの結節点たる問屋である。したがって、今日における大豆流通において、問屋がどのような役割を果たし、また流通変容が進展するなかで、どのような機能変化を迫られているのか、再度見直す必要があると言える。

（方法）

本論文では、今日における大豆流通と問屋の機能変化について考察することを課題とし、対象事例を北海道の産地問屋（道内産地問屋）に限定する。なお、事例として取り上げる問屋は６社である。

（結果）

道内産地問屋は、全般的に販売環境が悪化傾向にあるなかでも、需要増加によって販売量が増えていた。また、選別調整、倉庫・物流、契約栽培の３つの側面においても、一様に負担の増大が見られ、国産需要増大期にありながらもますます厳しい状況に追い込まれていることが明らかとなった。

（考察及び結論）

問屋は、流通の結節点として、メーカーからの量、質、価格、すべてにおける安定供給への要請に応じつつ、不安定な生産を抱える産地を結びつけなければならない。それゆえ、高品質かつ均質な原料大豆を、安定的に、しかも低価格で提供するために、そのような条件に見合う産地とのつながりを強化し、メーカーからの要求があり次第、いつでも対応可能な態勢を整えることを余儀なくされている。つまり、問屋のプール機能のさらなる強化が要請されているのであり、今日における大豆流通は、問屋の持つその機能に、より強く依存したかたちで展開していると言える。